

PROFILE

箕越 靖彦

国立岡崎共同研究機構生理学研究所
発達生理学研究室生殖・内分泌系発達機構



平成15年11月より生理学研究所発達生理学研究室生殖・内分泌系発達機構研究部門を担当させて頂くことになりました。

私は、昭和58年医学部を卒業後、すぐに愛媛大学医学部医化学第一教室の大学院生となりました。当時、教授であられた嶋津孝先生、助教授の斉藤昌之先生（現、北海道大学獣医学部教授）から生理学、生化学の基本を指導して頂き、その後も嶋津教授の指導の下、助手、講師、助教授として同研究室で平成12年まで研究に邁進してきました。

私は大学院生となってから一貫して、視床下部による代謝調節機構をテーマに研究を行ってきました。特に、自律神経系を介した代謝調節作用を分子レベルで解明することは、私の重要な研究テーマです。また、摂食行動と代謝調節作用が視床下部においてどのように統合・制御され、肥満や糖尿病の発症とどう関わるかを明らかにすることも、研究テーマの一つです。これらの研究テーマは、大学院生となってから現在まで変わっていません。平成11年に「エネルギー代謝に及ぼす視床下部—交感神経系の調節作用」という題目で日本肥満学会賞を頂いたことは、その後の研究において大きな励みとなりました。

平成12年から平成15年までの4年間、Harvard大学Barbara B. Kahn教授の研究室に留学しました。Kahn教授は、レプチンが視床下部—交感神経を介して骨格筋に調節作用を及ぼすことを報告した私の論文に興味を持ち、研究室ではそのシグナル伝達機構を調べることになりました。私どもは、当時注目されつつあったAMP-acti-

vated protein kinase（AMPキナーゼ）に着目し、留学後すぐにレプチン投与による骨格筋や視床下部でのAMPキナーゼ活性の変化を調べました。その結果、レプチンが視床下部—交感神経系を介して、また骨格筋に直接作用を及ぼすことによって、骨格筋におけるAMPキナーゼを活性化し、その作用を通して脂肪酸の酸化・分解を促進することを見いだしました。レプチンは、摂食行動を抑制するとともに、エネルギー消費を亢進することによって動物を“やせ”させるホルモンですが、その作用の一部が視床下部—交感神経—骨格筋AMPキナーゼの働きによって引き起こされることを明らかにしたわけです。さらにその後、AMPキナーゼが、視床下部において摂食行動の調節に関与することも分かりました。これらの論文は2002年と2004年にNatureに掲載されました。

脂肪細胞から分泌されるホルモン・レプチンが発見されて以来、この研究分野は大きく進歩し、毎週何らかの新しい発見がNatureやCell, Scienceなどで報告されています。このような日進月歩の研究分野に自らが参加できることは大きな幸せであります。日本の研究者は、他分野同様この分野においても多大な貢献をしています。しかし多くの若い研究者にこれまで以上に参加していただき、この分野をますます発展させて頂けることを切に願っています。

略歴

昭和58年

愛媛大学医学部医学科卒業

昭和62年	愛媛大学大学院医学研究 科博士課程卒業	平成12年～平成15年	米国ハーバード大学医学 部に留学 (Visiting Asso- ciate Professor, Lectur- er)
昭和62年～平成14年	愛媛大学医学部助手・講 師・助教授	平成15年	生理学研究所発達生理学 教授
平成4年	米国シカゴ大学生化学教 室に留学		